

第一部

10月15日、秋期講座第二回目は、悲喜劇のジャンルに属す『シンベリン』を取り上げました。神父様が『シンベリン』を不出来な劇とおっしゃったので、僭越ではございますが、シェイクスピアのために劇の弁護を少々申し上げることにいたしましょう。

『シンベリン』は、戯曲で読むよりも舞台上で映える劇でございます。最終場面の第五幕第四場は486行、本日取り上げる『冬物語』の第五幕第三場が155行であるのと比べると、終幕の比重が重い劇なのです。最終幕では、家族の再会を含めて20を超える事柄が語りで解き明かされ、ハッピー・エンディングへと進みます。

シェイクスピアは、通常、無駄な繰り返しを避けますが、この劇は例外です。舞台上で上演した出来事が繰り返し語られます。しかも、語りは、観客が目にした出来事とは微妙にニュアンスが違っているのです。シェイクスピアは、上演された事実と語りの内容との微妙な変化を活用し、観客反応を操作する高度なテクニックを使ったように思われます。

戯曲を読みますと、数多くの問題が一気に解き明かされる終幕には偶然やご都合主義が多用され、リアリティに欠ける印象です。ところが、劇場では、語りで絡み合った筋が、ご都合主義的に次々と解決され、喜ばしい事実が積み重なるたびに、客席は笑いに包まれ、不思議な感動と高揚感が生まれます。ロンドンのナショナル・シアターやストラトフォード・アポン・エイヴォンのRSCの上演でも、『シンベリン』は大変な人気でした。

『シンベリン』は、劇場の観客反応を知り尽くした晩年のシェイクスピアが、複雑な筋を終幕で一気に解決する冒険に挑戦したように感じられます。日本では上演の機会が少ない作品ですが、是非、劇場で『シンベリン』をお楽しみください。

神父様の御講義の復習に入りましょう。『シンベリン』は1623年に出版された第一・二つ折り本の悲劇の部分に入っていますが、ジャンルとしては悲喜劇です。悲劇『リア王』では紀元前7世紀の古代ブリテン王国が舞台となっていますが、実際はイングランドが舞台でした。一方、アウグストゥス・シーザー時代のローマ支配下のブリテン王国を扱った『シンベリン』では“Britain”という言葉が25回も使われています。シェイクスピアは、ウェールズ人のテューダー家が支配する国としてのブリテンを念頭に置いていたとの御説明を頂きました。

テューダー朝は、ローマ・カトリック教会からの離脱宣言以来、「ブリテン」という名称を好んで用いるようになりました。ヘンリー八世のローマからの離脱が、イングランドの最初の“Brexit”ですから、2016年の国民投票は二度目の“Brexit”（EU離脱）となります。

シェイクスピアの悲喜劇は、『テンペスト』以外、全てでヘンリー八世を描いています。『シンベリン』の国王がヘンリー八世を暗示しているのであれば、国王の二番目の王妃はヘンリー八世の二番目の王妃アン・ブーリンです。先妻でイモジェンの母親はヘンリー八世の最初の王妃キャサリン・オブ・アラゴン、イモジェンは、父の離婚にも、ローマ・カトリック教会からの離脱にも反対したメアリ王女となります。

劇の冒頭、イモジェンは、国王の許可なく密かにポステュマス・リーオネータスと結婚したため、国王の不興を買います。ローマに追放されたイモジェンの夫は、レジナルド・ポウル（Reginald Pole, 1500-58）を連想させます。ポウルの母方の祖父は、クラランス公爵ジョージ・プランタジネット、祖母はイザベラ・ネヴィルですから、エドワード四世とリチャード三世の血筋を受け継ぐプランタジネットの末裔でした。ポウルは平信徒のまま枢機卿となり、1549年の教皇選挙では一票の差で教皇の座に就くことができませんでした。ポステュマスを形容する際、教皇の無謬性を暗示する表現があるのは、ポステュマスに、教皇になる可能性があったレジナルド・ポウルを響かせていると思われます。彼は、カトリックだったメアリー一世の花婿候補でした。1556年に叙階した後、カンタベリー大司教となり、イングランドとローマ・カトリック教会との関係修復に努められました。

ローマ軍の将軍カイラス・ルーシアスは、ローマへの貢物を再開するようブリテン王シンベリンに命じます。ところが、王妃と王妃の息子クローテンは、ブリテンが独立国であると主張し、ローマへの貢物を拒否するのです。『リア王』の劇中で言及される唯一の地名はドーヴァーでした。そのドーヴァーに物語が集約したように、『シンベリン』に登場する唯一の地名ミルフォード・ヘイヴンに全てが集結します。ミルフォード・ヘイヴンは南ウェールズの港町で、ローマ軍が上陸した場所であり、フランスに逃亡していたヘンリー・テューダー（後のヘンリー七世）が上陸した場所でもあります。

宮廷を抜け出したイモジェンは男装してフィディーリと名乗り、ミルフォード・ヘイヴンに向かいます。途中、昔、シンベリン王に仕えていたベレーリアスと出会いました。彼は、国王に仕えていた頃、ローマと通じていると讒言され、追放の身となります。仕返しに王の二人の王子を連れ去り、密かに養育していたのです。イモジェンは、飲み薬によって仮死状態になり、目覚めた後、ローマの将軍に仕えることとなります。その後、複雑な筋が絡み合い、物語の解決は終幕に委ねられます。

劇の中で、天上的な出来事と地上的な出来事が起こります。天上的な出来事はジュピターの登場。地上的な出来事は邪悪な王妃の自殺です。邪悪な王妃の死により、シンベリン王はローマ軍に勝利したにもかかわらず、ローマ軍への貢物を再開します。シェイクスピアが教会一致に賛同しているかのように、シンベリン王は、ローマの旗とブリテンの旗を共になびかせるがよいと語り、ブリテン王国とローマの関係修復を示して劇が終わります。

第二部質疑応答

質問1：テューダー家とウェールズの関係に関して、説明を加えていただけますか？

お答え：イングランド王ヘンリー五世（1387-1422）の王妃でヘンリー六世の母キャサリン・オブ・ヴァロワ（Catherine de Valois, 1401 - 37）は、ヘンリー五世の死後、ウェールズの血をひく秘書官のオウエン・テューダー（Owen Tudor, 1400-61）と事実上の婚姻関係にありました。

ヘンリー六世（1421 - 71）は、父親の異なる弟エドモンド・テューダー（Edmund Tudor, 1st Earl of Richmond, 1431-56）とジャスパー・テューダーを弟と認め、リッチモンド伯、ペンブルック伯に叙します。このエドモンド・テューダーがサマセット公ジョン・ボーフォートの娘マーガレット・ボーフォート（Margaret Beaufort, 1443-1509）と結婚しました。彼女は、ランカスター公ジョン・オブ・ゴント（John of Gaunt, 1st Duke of Lancaster, 1340-99）の曾孫です。エドモンド・テューダーとマーガレット・ボーフォートの子息ヘンリー・テューダー（1457-1509）は、母マーガレット・ボーフォートの血統から王位継承権を得ました。マーガレット・ボーフォートは敬虔な女性で教育に尽力し、ケンブリッジ大学クライスト・カレッジ、セント・ジョンズ・カレッジを開学しました。

ヘンリー・テューダーはリチャード三世を倒し、ヘンリー七世としてイングランド王に即位し、エワード四世（1442 - 83）の娘エリザベス・オブ・ヨーク（1466-1503）と結婚し、ランカスター家とヨーク家の融和を図りました。

ヘンリー七世の次男ヘンリー八世（1491-1547）がウェールズ人のアーサー王の末裔と強調するのはローマとの関係を希薄にする意図によるものです。

神父様は、更に、後にヘンリー七世となるヘンリー・テューダーが上陸し、劇中でもローマ軍が上陸するミルフォード・ヘイヴンの地理を詳しく御説明くださいました。

質問2：イモジェンの継母の王妃がブリテン王国の独立を主張することへの神父様のコメントは？

お答え：神父様はキリスト教の初期の宣教の歴史に触れて、ローマとイングランドの関係をご説明くださいました。キリスト教のイングランドへの布教が、ローマからの宣教とアイルランドからスコットランドを経由して行われた宣教があったけれど、イングランドはローマの習慣を受け入れる決断をくださったという歴史的経緯を御説明くださいました。長くなりますので、詳細はHPをご覧ください。

最後にプリントの引用個所を神父様に倣って全員で朗唱し、閉会しました。